

*庭師?世界を歩く<フランス編> 後半

* 第7日目 (5月30日)

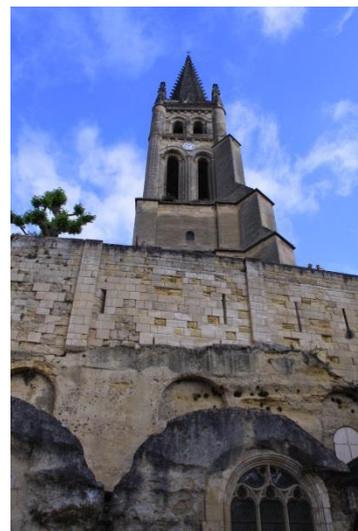
今日は、ボルドー近郊の、ワインの産地としては初めて世界遺産に登録されたサンテミリオンへ…。最高級ボルドーワインの産地です。8世紀に、修行僧聖エミリオンが隠遁生活を送るために洞窟を掘ったのが始まりとか。聖エミリオンの死後、弟子たちが地下の石灰岩をくり貫いて造ったのが9世紀のモノリス(一枚岩)教会。

市街散策後、ミニトレインでブドウ畑巡り。現在でもワインの貯蔵は石灰岩をくり貫いて作った、ケーブ(洞窟)を利用。最高級ワインは、主に石灰岩と粘土からできている土壌が造りだしているそうです。

ここで作られるワインは、メルロとカベルネ・フラン種のブドウから作られ、豊かなコクとまるやかさを持っていると言われています。タンニンが穏やかで、木いちごのような香りがするものが多いそうです。

ブドウ畑の中にバラが咲いていました。ブドウとバラ、既にお気づきの方も…。そうです、「バラは病気に

罹りやすいので病気の兆候がつかめる。」と言うことらしい。小生も、耳にはしていましたが…。が、どうやら、否定的な意見も多いようです。科学的にも



写真上左: 地下墓地入口の補修/上右: 教会と鐘塔



写真上左: 市街で見かけた中庭
/上中: ブドウ畑と鐘塔遠景
/上右: ブドウの樹
/右: ブドウ畑とバラ
/下左: 教会遺跡
/下: シャトーとケーブ



その効果は…。ちなみに、シャトーの中庭、垣根にはバラが咲き誇っていました。ブドウの仕立て方は、縦に枝を延す垣根仕立てか、棒仕立てと呼ばれる栽培方法。日本では、多雨多湿の気候に適した棚仕立てが主流ですが…。

中庭は、街路から少し入ったところに…。

回廊に囲まれた中に庭。簡素です。石塔と芝庭。多分、教会施設の一部だと思いますが・・・。

自由散策後、再びボルドーへ戻り、新幹線 TGV でロワール地方のトゥールへ。二等車両とは思えないほどの豪華さ。ビュッフェでビールを購入。車窓を楽しみながら昼食のサンドウィッチを・・・。約 2 時間 30 分ほどでトゥールの新幹線駅サン・ピエール・デ・コール駅到着。

TGV、開業当初は在来線と共用だったとか。近年、専用路線が完成し、本来の高速鉄道となったようです。どうやら、今回利用したボルドー～トゥール間は、路線開業間もないようです。

トゥールに着いた頃には雨が・・・。明日からは雨の中かも・・・。その夜のニュースで、フランス北部は大雨だとか・・・。

フランスでは、良く見かける街路樹。道路右側がプラタナス、左側がセイヨウトチノキ。一般的な剪定でした。ホテル前のロータリーに植栽されていました。椀状の花弁の中に昆虫が・・・。と思ったのですが、どうやら、花が終り、種ができていたようです。また、「花卉」や「萼(ガク)」ではなく「苞(ホウ)」。蕾を包んでいた葉です。苞葉(ホウヨウ)とも・・・。この植物、勿論、眼にするのは初めて。それにしても、変わった花です。地中海沿岸に分布しているとの事。名前は帰国後に・・・。ユーフォルビア・カラキアスでした。

ところでワインですが、「肉料理には赤を、魚料理には白を」と聞いていましたが、最近、カジュアル的には、好みに合わせてどちらでも・・・という流れも出てきているとか・・・。味覚は好みの問題なので、これでも良いのでは・・・。

赤ワインと白ワインについて・・・。赤ワインは黒ブドウが、白ワインは白ブドウや黒ブドウが原料。皮や種と一緒に絞った果汁を使うのが赤ワイン。ブドウの皮や種を除いて絞った果汁だけを使うのが白ワイン。一般



写真左：ボルドーの駅舎/上中：TGV 車両 /上右：TGV 二等車両



写真上左：セイヨウトチノキ（トチノキ科トチノキ属）と
プラタナス（スズカケノキ科スズカケノキ属）の街路樹
/上中/上右：ユーフォルビア・カラキアス（トウダイグサ科トウダイグサ属）

フランスでは、良く見かける街路樹。道路右側がプラタナス、左側がセイヨウトチノキ。一般的な剪定でした。ホテル前のロータリーに植栽されていました。椀状の花弁の中に昆虫が・・・。と思ったのですが、どうやら、花が終り、種ができていたようです。また、「花卉」や「萼(ガク)」ではなく「苞(ホウ)」。蕾を包んでいた葉です。苞葉(ホウヨウ)とも・・・。この植物、勿論、眼にするのは初めて。それにしても、変わった花です。地中海沿岸に分布しているとの事。名前は帰国後に・・・。ユーフォルビア・カラキアスでした。

ところでワインですが、「肉料理には赤を、魚料理には白を」と聞いていましたが、最近、カジュアル的には、好みに合わせてどちらでも・・・という流れも出てきているとか・・・。味覚は好みの問題なので、これでも良いのでは・・・。

赤ワインと白ワインについて・・・。赤ワインは黒ブドウが、白ワインは白ブドウや黒ブドウが原料。皮や種と一緒に絞った果汁を使うのが赤ワイン。ブドウの皮や種を除いて絞った果汁だけを使うのが白ワイン。一般

に赤ワインはコクや重みがあり肉料理に合うものが多く、白ワインは甘口から辛口までさまざまに魚料理に合うものが多いそうです。

それでは、体への効果は・・・こんな記述が見つかりました。

カロリーはどちらも同じくらい。ビールと比べると、カロリーは少し高め。糖質が少ないそうです。赤ワインには果皮に含まれるポリフェノールに抗酸化作用があるので、悪玉コレステロールを抑制する効果があるとされ、動脈硬化の予防に効果が・・・。一方、白ワインは、体内のナトリウムを排出してくれるカリウムが多く含まれるため、高血圧の予防に効果があるとも言われているそうです。ワインにはナトリウムが含まれていないので、ワインを飲むと高血圧の安定に効果が期待できるかも・・・。さらに白ワインには抗菌作用があると・・・。大腸菌や食中毒の原因になる細菌を殺菌する作用が・・・。フランスで生ガキを食べる場合には昔から白ワインと一緒に飲まれているようで、食中毒予防に使われていると考えられているそうです。が、いくら健康に良いとは言っても、飲み過ぎはいかかなものかと・・・。

* 第8日目 (5月31日)

今日は、世界遺産「シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間のロワール渓谷」の古城巡りです。今回の旅行で、一番、楽しみにしていたところ。青空



写真上左：二重螺旋階段/上右シャンボール城/下：城内にて

と緑に映える古城を一目と・・・生憎、朝から雨模様。昨日までの好天続きとはお別れのようにです。

最初に訪れたのはシャンボール城。ロワールの古城の中心的城館。レオナルド・ダ・ビンチを心酔していたフランソワ一世の道楽で造られたとか・・・。イタリア遠征の際、イタリア・ルネッサンスの文化に触れ、これに影響を受けて造られたそうです。もとは狩猟用の離宮。完成した城館には、部屋が 440、暖炉が 365、階段が 74 も・・・。

建築上の見所の一つに、二重螺旋の階段があり、二つの階段を使えば、相手に出会うことなく 3 階まで昇り降りができる構造。レオナルド・ダ・ビンチの設計だという説もあるもののこれは確かではないそうです。また、この城は 1981 年から 2000 年まで単独で世界遺産に登録されていたそうです。



シャンボール城には、防御の構造物は何もないのも特徴の一つ。全体が、華麗に装飾され、当時としても時代錯誤なほど・・・。建築の基本は、開き窓、外廊下、屋上の広大なオープンスペースなど、イタリア・ルネッサンス様式を取り入れているものの、寒冷な中央フランスには不向きだそうです。空間が大きすぎて暖炉では暖が取れず、冬の生活は大変だったようです。フランソワ一世は、結局、合計数週間しか滞在しなかったとか・・・。



写真上左/上右：正面(南東)側庭園と並木
/下：北東側庭園

城の正面に広がる広大な庭園。勿論、代表的なフランス式庭園。ただし、ベルサイユ宮殿の庭とは比較にならないほど、簡素。大まかな区画の中にトピアリーというか、

整形したセイヨウシナノキ(スズカケノキ科スズカケノキ属)もしかしてセイヨウボダイジュ(シナノキ科シナノキ属)?の並木が・・・落ち着いた感じの庭でした。

バスから降りるころは、傘が入用なほどの雨。バスで駐車場を離れるころには、周囲の低地が水浸し、多くは、芝で覆われた庭だそうです。駐車場の脇に小さな水路がありましたが、溢

れている様子ではないようでした。ところがです・・・北東側の庭園、この時点では、まだまだの様子でしたが、翌日には水で覆われていたようです。道路などの冠水でロワールの古城巡りはできないとのニュースも耳には入っていましたが、まさか?でした。

アンボワーズ城を見学のため、ロワール川沿いに移動。途中、道路冠水のため、通行止め。通行止め区間の



直前まで、案内なし。「これがフランスなのよ」と、ガイド嬢も苦笑い。それでもドライバーさん、苦勞しながら、アンボワーズ城の見えるロワール川対岸まで。ご苦勞様。上流部は、かなりの降雨のようでした。



アンボワーズ城。ここには古代から要塞が・・・15世紀

写真上左：ロワール川対岸からアンボワーズ城/上右：洞窟レストラン

末にイタリア遠征から戻ったシャルル8世

がルネッサンスの粋を集めた城に改築したそうです。レオナルド・ダ・ビンチも4年間暮らし、城内の礼拝堂には彼が眠っているそうです。

今日の昼食は、洞窟レストラン。石灰岩をくり貫いて造られたもので、かつてはワインの貯蔵庫として使用されていたそうです。

シュノンソー城に着くころは、雨もほとんど上がっていました。しかし、川の水は濁って・・・澄んだ川面



写真上：カトリーヌの庭園からシュノンソー城
/右：カトリーヌの庭園

一人目：ディアヌ・ド・ポワティエ、三人目：カトリーヌ・ド・メディシス、四人目：ルイーズ・ド・ロレーヌ、五人目：デュパン夫人、六人目：プルーヴ夫人。

カトリーヌ・ブリゾネの時代は、川岸の一角に、こじ



写真上：ディアヌの庭園からシュノンソー城
/下左/下右：ディアヌの庭園



に映える写真が・・・残念。ロワールの古城のなかでも、1、2を争う人気だとか。ロワール川支流のシェール川をまたぐように作られた、珍しい構成の城。

川を渡る部分は、狩猟のため対岸に渡ることができるように、と増築されたとか・・・もう一つ、他の城にはない特徴が・・・それは、16世紀の創建以来19世紀まで、代々の城主が女性。「6人の女の城」とも・・・

一人目：カトリーヌ・ブリゾネ、二



んまりとした城。ディアヌ・ド・ポワティエの時代に対岸に渡る橋を、カトリーヌ・ド・メディシスの時代に橋の上にギャラリーを造って、今の景観になったそうです。

代々の城主が女性とあってか、庭の造りも、優しさが感じられ、女性ならではの感性によるものと感じました。二つある庭園、ディアヌの庭園とカトリーヌ(三人目城主)の庭園。勿論、フランスを代表するフランス式庭園。日常生活の中で庭園散策を楽

しむことが基本に?・・・。庭園から見る城もまた・・・。時間の関係でディアヌの

庭園を前景にしたシュノンソー城が撮れず、少々心残りが・・・。

駐車場から城に至るプラタナスの並木道。かなりな樹齢と思われまします。が、かなり手が入られているようでした。下から見上げると、程よく空が見え、



開放感のある並木でした。時折、葉や枝についた水滴が、顔に・・・。

写真上左/上中：城への並木/上右：ギャラリー

シュノンソー城からトゥールへの帰路、またまた冠水で通行止め。しかもこれまた通行止め区間直前。目の前は既に冠水・・・。大型バスなのでUターンもできず・・・。後続の乗用車が、無視して強行突破。見ていたドライバーさん、後を追うように強行・・・。ともかく、無事通過。

* 第9日目 (6月1日)

今日は少し早めの出発。大西洋岸を北上して、ノルマンディ地方のモン・サン・ミッシェル(世界遺産)へ・・・。今日も曇天。移動中には降雨も・・・。トゥールから約3時間30分の、今日もロングドライブです。

昼食には、この地方の地ビールのシードルを・・・。材料はリンゴ。飲んでみないと解らない味。最近では、日本でも販売されているとか・・・。女性に好まれる味では・・・。

食後はいよいよモン・サン・ミッシェルへ・・・。

モン・サン・ミッシェル・・・。708年、アブランシュの司教の枕元に、大天使ミカエルが現れ、「かの岩山に我が名を称える聖堂を建てよ」と告げられたのが始まりだそうです。島へはレストランの近くの乗場からシャトルバスで入口の近くまで。

モン・サン・ミッシェルには色々と変遷があったようです。ベネディクト派の修道院～要塞～牢獄～国立博物館(19世紀)～修道院(20世紀)にと・・・。今ではフランス一の観光地だとか。

入口から島のメインストリートのグランド・リュを経て修道院の中へ・・・。グランド・リュでは、通路の補修も行われていました。やはり、手作業。根気のいる作業です。



外からの景観も素晴らしいけれど、修道院附属教会前の西



写真上：モン・サン・ミッシェル



写真左：補修作業/上：干潟

のテラスからは、対岸と周囲の干潟の様子が・・・また、修道院最上階の回廊と中庭も、美しい空間でした。修道士の祈と瞑想の場だそうです。



回廊の柱は 137 本からなる二重列柱。珍しい構成です。1 は神、3 は三位一体、7 は天地創造に要した期間だとか・・・。奥と手前の柱の間隔が瞑想時の一步の歩幅とも・・・。慣れるには結構、時間がかかるのでは・・・と俗人の考えも。

島内住人は修道士 7 人、修道女 4 人、一般人 7 人が登録されている



るそうです。それにしても。曇天は残念。

対岸に咲いていた花です。ニオイシュラン・・・、宿泊ホテルの入口に咲いていました。花期は5月

写真上右：中庭/上中：ニオイシュラン(キジカクシ科センネンボク属)

/上右：セイヨウオダマキ(キンポウゲ科オダマキ属)

～6月。日本でも多く植えられていますが、なかなか個

人宅の庭では花を見る機会も少なく、珍しいさも手伝って一枚。青い花はセイヨウオダマキの仲間ようです。シャトルバス乗場近くで見られました。セイヨウオダマキにも多くの種類があり、個別の名前を特定するには、かなり難しい花。

長い「距(キョ)」の形、花の色など・・・。

「距」は、花の「萼」や花冠の基部近くから後方へ突出した部分のこと。その内部に蜜腺があるそうです。葉と併せて、オダマキの大きな特徴の一つだと思います。

移動途中の高速道路で見かけました。南フランスからモン・サン・ミッシェルに移動する間、多くみられた光景です。

南フランスではセイヨウトチノキ=マロニエ、

プラタナス、カエデ(ムクロジ科カエデ属)類が目立っていました。高速道路沿いにはスモークツリーやエニシダ、ヤドリギを多く見かけました。これらの樹木は、市街地ではほとんど目にできなかったので、車の走行に伴う繁殖と思いますが・・・。

市街の場合は剪定が進んでいるのかもしれませんが。ヤドリギ、エニシダ・・・。いずれも車窓からなので、像が流れています。スモークツリーは、撮影に失敗。

このヤドリギにもヤドリギ、セイヨウヤドリギ他数種があるらしい。ヤドリギ・・・。広義にはヤドリギ類の



写真上：エニシダ(マメ科エニシダ属)

/右：ヤドリギ(ビャクダン科ヤドリギ属)

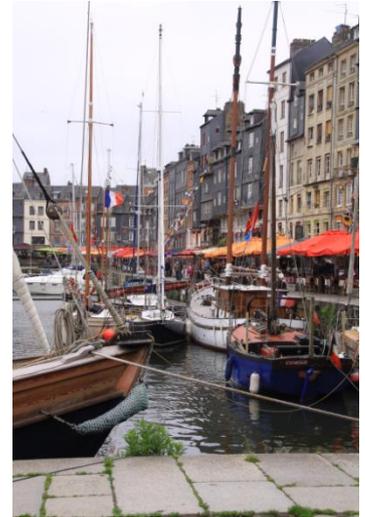


総称ですが、狭義には、日本に自生する一種でセイヨウヤドリギの亜種とされる種の標準和名。セイヨウヤドリギの寄生樹木はリンゴ、ポプラ、シナノキまれにコナラ。日本のヤドリギはエノキ、クリ、ブナ、クワ、サクラなどだそうです。いずれにしても樹木の上でしか、生きられない。不思議な植物です。

エニシダ・・・これにはエニシダとヒメエニシダが・・・。エニシダの種は成熟すると殻が激しく爆発することによって時には 15mほども遠くへ飛んでいくそうです。また、全草にアルカロイドを含み、有毒。「エニシダ」として鉢植で売られているものは、ヒメエニシダが多いそうです。

スモークツリーは、花後、綿毛のような穂が木全体を包み込み、煙を上げているように見えることから・・・。

写真下：オン・フルール旧港



* 第10日目 (6月2日)

今日は、イギリス海峡沿岸のオン・フルールとエトルタへ向かいます。オン・フルールへはバスで2時間、エトルタへは、さらに約1時間。今日も曇天。移動途中、降雨はありましたが、散策には影響なし。オン・フルールはセーヌ川河口の街。モネの師ブーダンの故郷。オン・フルールの旧港は、カラフルな家に囲まれ、色とりどりに並んだヨットの眺めが目を楽しませてくれました。かつて、15世紀、イギリスとの百年戦争時には戦略的拠点となった港町だそうです。今はセーヌ川対岸のル・アーヴルが交易の拠点に・・・。

最初にフランス最古で最大の木造教会サント・カトリーヌ教会へ・・・。百年戦争で壊された後、オン・フルールの船大工

によって建てられたものだそうです。そのため、天井は、船底をひっくり返したような、独特の造り。街のシンボル。モネやブーダンら多くの画家によって描か



たそうです。

写真上左：サント・カトリーヌ教会/上中：教会の天井/上右：教会の鐘塔

その後、旧港を一回り。お腹が空いたころ、ムール貝の漁師風料理を・・・。やはり、ボール山盛りで出てきました。ベルギーではバケツでしたが・・・。どちらも量には負けていないようでした。

昼食後、一路、エトルタへ・・・。エトルタは、アヴェルの崖とアモンの崖に挟まれた街。かつて、モネやクールベが何度も描いたという白亜の断崖が・・・。残念ですが、曇天のため、白亜は・・・。仕方なく、土産物屋に立ち寄って、絵葉書で確認。

この景観、海蝕によるもの。今でも年10~50cm侵食されているとか・・・。結構、風が強く、帽子を飛ばさ

れないかとヒヤヒヤ。アモンの崖上まで足を延ばして・・・。アヴェルの崖は、像が鼻を水につけたような景観。その後方には、ルパンシリーズの「奇岩城」のモデルになったと言われている針岩が・・・。



写真上左：アヴェルの崖/上右：アモンの崖(ドーミーハウスのテラスにて)

/下右：モーリス・ルブランの家

市街には怪盗ルパンの家と称される作家モーリス・ルブランの家がありました。宿泊は、市街からアヴェルの崖に向かう途中にあるドーミーハウス。ここから、アヴェルの丘まで散策できるということでしたが・・・。

市内散策中に見かけました。アリウム、シレネ・ブルガリスは、アモンの崖に登る遊歩道の脇に咲いていました。結構、強い風にも負けじ・・・。といっても、風のあまり当たらない場所のようでした。

ルリチョウソウは市街住宅の壁にハンギングされていました。

ベニバナトチノキ・・・。ここでも見かけました。日本やイギリスでは白でしたが、ここフランスでは、まだ、白は目にしていません。



写真上左：シレネ・ブルガリス

(ナデシコ科マンテマ属)

/上中：アリウム(ユリ科ネギ属)

/上右：ベニバナトチノキ

(トチノキ科トチノキ属)

/下左：ルリチョウソウ

(キキョウ科ロベリア属)

エトルタ郊外で、車窓から撮影。三軒とも、ごくご近所。ヨーロッパらしい？開放的な庭。建物は三者三様。モーリス・ルブランの家の周囲は壁で囲まれた上、樹木が茂っていたので、中を覗くことはできませんでした。が、ここは有料で入場はできます。小生、は入場口から一枚・・・。それにしても、広い庭です。モーリス・ル



写真上左/上中/上右：エトルタ郊外にて

ブラン・・・40歳過ぎるまでは・・・シャーロック・ホームズのアンチヒーローとして「泥棒紳士」のアルセーヌ・ルパンを・・・それが当たったそうです。

* 第11日目（6月3日）

早いものです。後残り少なくなりました。今日は、モネが43歳～86歳で亡くなるまでの43年間を過ごした村、ジヴェルニーへ。あの「睡蓮」を



写真上/左：睡蓮の池

生んだ場所でも・・・エトルタからはセーヌ川沿

いに、バスで約2時間。パリも、すぐそこ。

駐車場から敷地に足を踏み入るとそのまま、まずは睡蓮の池へ・・・。モネは日本の文化を好んだようです。池を造り、日本橋と呼ばれる緑の太鼓橋をかけ・・・。池の構想など、モネが独自に・・・。

絵画だけではなく、多方面にわたる知識・才能を持ち合わせていたようです。

この睡蓮の池で、四季折々、朝から夜まで・・・。刻々変化する景観を描き続けたそうです。京都比叡山のガーデニングミュージアム比叡に、この庭を模した庭が・・・。過日、緑友会のハイキングで訪れたところです。池の規模は、モネの家の睡蓮のほうが広く、植栽群もはるかに豊富。

アトリエのあるモネの家には多くの浮世絵が飾られていました。モネの蒐集だそうです。モネの家の庭を含め、かなりな品種・種類の、主に花類ですが、植えられていました。当然ですが、専属のガーディナーによるメンテナンスも・・・。授業の一環と思いますが、多くの児童が、プリント片手に植物観察を・・・。

睡蓮の池は、自然風の、落ち着いた雰囲気でしたが、家の前庭は、



写真上：アカバナアカシア
(マメ科ハリエンジュ属)

なんとなく雑多な感じがしました。その庭で見つけた珍しい？花を少し紹介。

入園口に咲いていたアカバナアカシア。ハリエンジュ属のアカシアは、ニセアカシア・・・。赤色の花があるとは、初めてです。札幌から来られていた方から、赤い色のアカシアがあるのですが、あれもアカシアですよね？と尋ねられ・・・。実物を観るまでは赤い色が？・・・。ルピナス・リリアン、カラマツソウ、セイヨウバイカウツギは睡蓮の池畔で・・・。

ルピナス・リリアン・・・ルピナスも品種の多い植物。名前は、ラテン語でオオカミを意味するループスからだとか・・・。吸肥力が非常に強い特徴を貪欲な狼にたとえたものとか・・・。花の様子がフジに似ている上、下から咲き上がるため、ノボリフジ(昇藤)とも呼ばれています。

カラマツソウは北海道から九州まで広く分布する大型の野草。人里近い里山から、山地の草原、湿原、高山の草原帯などの日当たりに見られ、夏山の代表的な植物の一つだそうです。花のように見える白い部分は「花糸(しべ)」。「萼」は欠落して花弁はありません。

セイヨウバイカウツギ、勿論バイカウツギの仲間。そもそも、ウメの花に似ている所からバイカを冠。ですが、ウメの花弁は5枚、バイカウツギは4枚・・・。

サルビア・ホットリップス～チェリーセージ、インパチェンス・コンゴレン

シス、アリウム、アリウム・シュベルティはモネの家中庭で見かけました。ホットリップス

やアリウムの仲間は、奈良でも良く見かけられるようになりました。多くの品種があるようです。

インパチェン



写真上左：ルピナス・リリアン(マメ科ルピナス属)

/上中：カラマツソウ(キンポウゲ科カラマツソウ属) /上右：同葉



写真下左：インパチェンス・コンゴレンシス
(ツリフネソウ科ツリフネソウ属)

/下中：セイヨウバイカウツギ
(ユキノシタ科バイカウツギ属)

/下右：サルビア・ホットリップス
～チェリーセージ(シソ科アキギリ属)



写真上：アリウム

/下：

アリウム・シュベルティ
(両種ともユリ科ネギ属)



ス・コンゴレンシスは長い[距]が特徴。一見、
ハコの嘴にも・・・

* 第12日目 (6月4日)

今日が観光の最終日。終日パリ観光です。
セヌ川岸は世界遺産。生憎の曇り空。午前
中はルーブル美術館の見学と車窓観光を予定
でしたが、先日からの雨で、セヌ川が増水。

氾濫の恐れもあるということで、セヌ川畔にあるルーブル美術館やオルセー美術
館は閉館。収蔵品の多くが、地下に置かれているため、上階へ移動させているためだそうです。

確かに、かなりな増水のように見えますが、氾濫までとは思われませんでした。過去 30 年で最も水位が高
くなった(+6m30cm)とか・・・。1910年には+8m62cm。この時は、パリ中心部が水につかったとか・・・。
パリ市内のセヌ川では、川沿いにある遊歩道は水没していました。橋の上から川面を見る人も結構いたよう
です。

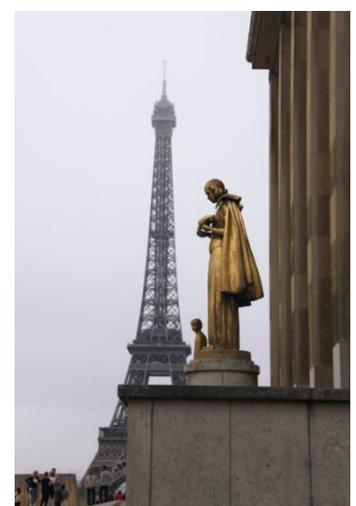
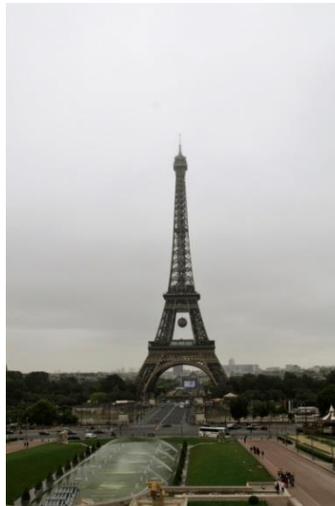
このため、印象派の作品が数多くあるマルモッ
タン美術館へ予定変更。ここには、モネの「印象・



写真上：モネの家



/右：竹林(睡蓮の池にて)



写真上左：オルセー美術館

上中/上右：エッフェル塔

(シャイヨー宮にて)

/下：パレ・ガルニエ正面バルコニー
から見たオペラ座大通り



写真上左：オペラ座大階段/上右：同グラン・ホワイトエ



日の出」がありました。予定より少々早く着いたため、入口で足止め。10分程度の早着だと思いましたが・・・規則は規則？

美術館を訪れる前に、エッフェル塔他へ・・・。EURO2016の直前ともあってサッカーボールが中央に・・・。エッフェル塔は、建設当時から賛否が・・・。その後取り壊し論議もあり、一票差で存続が決まったとか。それが、今では「パリの顔」。

その後、オペラ座へ・・・。全くの予定外。豪華な内装に・・・。大階段は、シャルル・ガルニエが、オペラ座を設計する際、



ボルドーの大劇場の大階段に触発されたとか。

午後は自由散策。オペラ座の前からルーブル美術館、シテ島のノートルダム

写真上左：ルーブル博物館
/上右：ノートルダム大聖堂
/下左：大聖堂前庭にて
/下右：ノートルダム大聖堂



大聖堂、植物園等を見学しつつ、ホテルまで、約3時間30分の散策。疲れしました。



大聖堂の前には、観光客も多く、入場を待つ列も、結構、長いようでした。美術館閉館の影響を受けているのかも・・・。大聖堂の前で見かけまし



た。派手？な出で立ちの鳥。ハトですよ？私もパリジェンヌとばかり・・・。それにしても・・・。

植物園の中にあつたプラタナスの並木道。刈込まれていました。作業も大変だと思いますが、このようなプラタナスの刈込は初めて眼にしました。今



回の旅の途中、一か所、場所が思い出せませんが・・・。同様に刈り込んだ並木道を通じた記憶があります。その時も、ガイドさんが、ボダイジュと言われたので、セイヨウシナノキだと思いますが・・・。

写真左/上：植物園にて

* 第13日目(6月5日)～第14日目(6月6日)

帰国日です。ホテルの入口に飾られていたキャラボクの盆栽です。イチイ(オンコ)の変種。オンコという呼び名、初めて耳にしました。札幌から参加された方から・・・北海道では、ごく一般的に使われているようです。

まだ、剪定前のようです。幹には縦方向に切れ込み?姿勢を矯正するため、縦割りを入れた後かも・・・。

シャルル・ド・ゴール空港 13:55 発エールフランス AF276 便で帰国の途に・・・整備遅れで30分遅れて離陸。成田へは6月6日、一時間遅れの9:30着。伊丹への便、羽田12:00発のため、ヒヤヒヤ。空港バスで約30分前に羽田着。ところがここでチェックインに時間が・・・。その上、荷物検査場で、この航空券では乗れないと拒否。航空会社で再発行。どうやら機械のトラブルだったようです。登場ゲートは、既に閉鎖。結局、小生が最終乗客。チェックインは済ませているとはいうものの、さすがに・・・。当方には落ち度がないので、何とかなるさ・・・でした。ということで、予定通り、帰ってくることができました。それにしても、もう少し、成田から関西への国内乗継便は増便できないものでしょうか?

日本～ヨーロッパ便は、シベリア上空を通るため、今の季節、終日、太陽が沈まない白夜。特に1万メートル上空ではなおさら・・・。おかげで、ブラインドは降ろしているとは言うものの、帰国便でも寝不足。疲れました。それでも、また懲りずに・・・。(by SM 記)



写真上：キャラボク

(イチイ科イチイ属)

～ 完～

2016年7月20日